

ただいま浪人

遠藤周作

ただいま浪人

遠藤周作

ただいま浪人

昭和47年 3月12日 第1刷発行

昭和51年 3月25日 第16刷発行

著 者 遠藤周作

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 郵便番号 112

電話東京(03)945-1111 (大代表) 振替東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社



© 遠藤周作 1972

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。 (文1)

目次

雨の日に	7
家族	19
訪問	33
診断	43
二つの日曜日	57
睦月	70
回想	86
梅の花	102
幻の娘	121
一つの生き方	134

孝ならんと欲すれば……	その人を探している	引き水	両刃の剣	朝あけ	弟	発表の日	雪	突然に……	試験	黄昏の道
281	269	256	239	225	210	196	184	172	160	148

純粹グループ	292
最初の夜	306
偵察	323
渦	335
生きること、生活すること	347
豚の幸福	357
かりそめの日々	367
交差点	378
切迫した日々	400
十月二十日	410

裝
幀
湯
村
輝
彦

長編小説

ただいま浪人

雨の日

日本は雨空だったので、羽田が近づくにつれて飛行機は少しゆれた。

和服に着かえた日本人スチュワードスが、おやつ代わりの寿司をくばりはじめたが、断わる客も多かった。なにしろ、サンフランシスコを発ってから、アンカレッジを経て、東京に向かう間、機内では次から次へと食べものや飲みものを出してきたからである。

「なんだか俺……養鶏場のニワトリのような気がしてきたな」

と中央の席にいた若い日本人客が、バンドをゆるめながら呟くと

「どうして」

隣席にいた同じ年格好の男がたずねた。

「だってさ、無理矢理に狭い籠に入れられて……餌ばかり食わせられる感じだろ」

「サービス過剰って奴だな。こりゃ」

「はなはだ日本的だよ」

「しかし、その日本をあれほど……お前、恋しがっていいじゃないか。日本の女が恋しいって」

それから二人は小さな声をだして笑った。どうやら、二人にはニューヨークか、サンフランシスコで怪しからぬ思い出があるらしい。

飛行機がまた、しばらくゆれる。右も左も白い霧のような雲で、その雲が切れてもすぐ新しい雲のなかに入るのである。

「気流の関係で、多少、ゆれておりますが、飛行には差し支えございません」

スチュワードスが不安そうに何かをたずねた客に職業的な微笑をみせながら、答えている。

一人の外人が酔っぱらいのような足どりで通路を歩きながら便所に向かつて行った。背はたかいが、いかにも風采のあがらぬ中年の外国人だった。

彼がトイレに消えると、振動がさつきよりひどくなつて

「安全ベルトをおしめくださいませ」

そう客に注意しているスチュワードスまでが座席につかまりながら歩いているぐらいである。

「こりゃ、ひでえや」

「嫌だぜ。帰国寸前であの世行きは……」

さっきの二人の日本人客も、多少、こわくなったのか顔を見合わせている。

向こうから、別のスチュワードスが、こちらのスチュワードスをおねがいでいる。

「薬と水をおねがいます」

「どうしたの」

「トイレに入ったお客さまが……気分が悪くなられたの」

「吐いた」

「ええ。そうらしいわ」

若い二人の日本人客はそのスチュワードスたちの囁きを耳にして

「吐いたんだってよ、今、ここを通って行った外人」

「へえ。だらしないう奴だな」

「毛唐は乗物酔いをあまりしないって聞いてたけれども」

「同じ人間じゃねえか。だらしないう奴は吐くさ」

便所からハンカチを口にあてて、問題の外人がよろめきながら出てきた。

なるほど、くるしそうに蒼白な顔をしている。

スチュワードスがそばによって何か囁くと、弱々しい笑みをみせて、うなずきながら、ハンカチで額をぬぐっている。

そして自分の席まで戻ると、ぐったりと眼をつぶって動かなくなった。

やがて鉛色のもの悲しい海面が雲の切れ目から見えはじめた。雨のふっている羽田の海だったが白い波がしらと何隻かの船が眼に入った。

「ながい間、おつかれさまでございました」

スチュワードスは始め日本語で機内に放送をした。

「おあずかりしておりますお手荷物は……」

それから濡れた家や建物や、道を走っている玩具のような車が次第に近づいてきた。鈍い振動をさせて飛行機は滑走路に車輪をぶつけた。黄色く枯れた芝が窓の向こうを走っていく。

もう安全ベルトをはずして、大きく背のびする人もいた。気の早い者は椅子から腰をうかせたり、窓に顔を押しあてて、遠くの送迎台の方に眼をやり自分の迎え人を見つけようとしている。

機内には甘いムード音楽がなりはじめた。検疫がすむまでまだ外には出られなかったが、どの顔にも疲労と安心感がただよっている。

「やれ、やれ」

「税関はうるさいのかい」

「うるさいらしいね。羽田は」

そんなささやきが聞こえてくる。

検疫の役人が出ていくと、タラップがとりつけられ、乗客たちは通路に一列に並んだ。

出口のところでスチュワードスが例の職業的な微笑をうかべて、黄色い傘をわたしている。外は、強くはないが風がふき霧雨がふっていた。

最後の客が姿を消したあと、機内をもう一度のぞいたスチュワードスは、がらんとした席にまだ一人の男が腰かけているのに気がついた。

「もしもし」

男は体を起こして眼をあけた。さきほど気分が悪くなつて便所で吐いた外人だった。

「オー、ソーリー」

気まりわるそうに男は立ちあがつて、スチュワードスにあやまると、

「だいじょうぶ」

無器用に体を動かし、妙な発音の日本語で

「だいじょうぶ」

とくりかえした。

それからゆっくりと棚においたコートをとって、もう誰もいない出口に歩いていった。雨が彼の額をぬらしたが、傘をわたす者はいなかった。風がその栗色の髪を毛を吹きあげた。

「変な外人……だわ」

スチュワードスはそのうしろ姿を見送りながら同僚につぶやいた。

「病気なのかしら、あの人」

その言葉通り、外人は雨に濡れるのもかまわず、送油車やバスの間をよろめくように歩きながら建物のなかに消えていった。

税関の前では、既に入国手続きをすませた連中が、自分のトランクが運ばれてくるのを待っている。

雨に濡れっぱなしの外人はそこに入ってくると、おとなしく立っていた。

向こうのガラスには迎えに来た人たちの顔が鈴なりに並んでいたが、外人はそちらの方に一度も眼をやらぬ。

彼には誰一人として迎えにきている者がいないようだった。

飛行機から運ばれた自分のトランクや鞆をもって乗客たちは幾列かにわかれると、税関の検査をうけた。

「きびしいなあ」

「ローマや巴里じゃ、税関があるのかないのか、わからんようなものだったがなあ」

そんな囁きが列の後尾でそっと洩れたが、それも無理もない。どの客もあけた鞆の中に手を入れ、調べられるからである。

その受験生たちのように緊張した客たちの後尾に、例

の外人もパスポートと古ぼけたトランクとを手にして立っていた。

實際縦から見ても横から見ても風采あがらぬ男である。同じ列にいる他の外人たちはいずれも堂々たる体格を洒落た洋服でつつんでいたが、彼とくると体も痩せているし、着ている洋服もズボンのあたりが丸くなっていた。

検査をすませた客たちは、やっと日本に戻れた喜びを満面にうかべ、ガラス扉一つ隔てた向こうで待ちわびている出迎え人の方に次々と歩いていく。

「お帰りなさい」

「お土産、買ってきてくれた」

そんな声にとりかこまれて、彼等は嬉しそうに握手をしたり、挨拶をとりかわしていた。

「ヘイ、ミスター」

ばんやりしている外人に税関の職員が声をかけた。

「ハブ、ユ、サムスイング、トゥ、デクレエア」

「ノー。なにもない」

妙な発音の日本語でこの外人が答えたので、苦笑した職員は

「ユア、パスポート、プリーズ」

パスポートを見せることを要求した。

米国人 ロバート・オノラ 四十三歳。

パスポートのなかには、この男の写真がはりつけてあった。実物そのままに、雨にぬれた犬のようにシヨボくれた衰しい眼をした顔がそこにうつっていた。

職業 広告代理店員

「鞆をあげてください」

「カバン」

「イエス、ユア、バゲジ」

外人はあわてて隅のすつかりすり切れた古トランクに鍵をさしこんだが、鍵穴がこわれているのか、それともこの男が無器用なのか、なかなか開かなかった。

うしろにいた客がいらしたのか舌打ちをしている。

やっと開いた鞆のなかを職員はのぞきこんで、下着やワイシャツに手をふれた。本と洗面道具にもさわってみた。日本に来る他の観光客のトランクにくらべると、それはあまりに粗末で貧弱だった。

「これだけ」

「おう。これだけ」

ロバート・オノラというこの外人ははじめて緊張した顔に笑いをうかべた。額に少し汗をかいている。

「ちょっと」

しめかけた鞆に手をかけて、税関の職員はもう一度、中をのぞきこんだ。鞆の隅に何やら小さな罐があったか

らである。

「これは」

ロバート・オノラは首をふった。

「これは、開けてください」

職員は少しきびしい声をだした。

うしろに並んで待っていた他の乗客たちも、ほかの列

の人たちも、みな職員の声に気がついた。

「規則ですから、見せて頂かなくては困ります」

職員は困ったように眼をしばたきながら言った。

外人は頑強に首をふってノーとくりかえした。

「どうしたんだ」

そちらを盗み見ながら、日本人たちが囁いている。

「エロ写真でも持っているのかね」

「そうじゃないだろ。罐のなかに入れているんだから、エロフィルムかもしれない」

「麻薬じゃないだろうね。近頃、不良外人のなかには麻

薬をそっと運んでくる連中が多いと言うから」

好奇心の視線を遠くから注がれて、困っている職員に

上司らしい男が助けに来た。

「見せて頂かないと、日本に入国できませんよ。ユー、

アングーススタンド？」

ロバート・オノラは諦めたように手を前にくんだ。

「あけて下さい」

「バードン」

「あなたが、この罐をあけて下さい。ユー、マスト、オ

ーブン、イット」

ロバートは不承不承に罐を掌にのせた。よほど大事な

ものらしく、蓋のまわりを更にセロハン紙がはりつけら

れている。

哀しそうな顔をして彼はそのセロハン紙をゆっくりと

取った。

みんな、その手の動きをじっと見つめている。やがて

罐のなかから、不吉な白い粉か、いかがわしいフィルムの

出るのを期待しながら……

セロハン紙をとると、罐の蓋に手をかけた。力を入れ

てはいるが、なかなか開かないようである。

「ちょっと」

見かねた職員が今度は手をだして、自分で蓋をとろう

と試みた。

「こりゃ、きつい」

それから疑わしげにロバートを眺め

「輪ゴムがないかなあ。手がすべる」

ゴムは誰も持っていなかった。仕方なく彼はハンカチ

で手をぬぐい、もう一度力を入れた。

蓋が開いた。職員は罐の中に指を入れた。

その指になにか薬屑のような黒い塊がつまみだされ

た。

「こりゃあ……」

と彼は驚いたように叫んだ。

「人間の髪の毛じゃないですか」

ロバートはじつとその髪の毛を凝視していた。せつな
そうに、苦しうに……

「一体、なんのために……ホワイ」

「スプニャー」

「スプニャー。思い出。ああ、そうか。そんなら、何も
匿すことはないのに。何を匿しているのかと思ひました
よ。結構です。鞆をしめてください」

職員は多少の後悔を感じたらしく、白墨でロバートの
鞆に大きなサインをした。

雨のなかをロバートは古鞆をぶらさげてタクシーに乗
った。

「マツダ、いてください」

「マツダ」

ギヤを入れかえながら運転手は首をかしげて、

「マツダ。さあ、どこかな」

「マツダ。アツギそば」

「ああ、そんなら町田だがな」

「そう、マチダだ」

運転手はクスッと笑った。この訝えない外人の日本語

が可笑しかったからである。

「お客さん、アメリカ人」

「はい。アメリカ人」

「日本語がうまいね」

お世辞を言われてロバートはぎこちなさそうに坐りな
おし

「うまくない。だめのこと」

「いや、うまい」

「うまくない」

「日本は、初めて？」

ロバートが黙っていたので運転手はもう一度、ゆっく
りと発音してやった。

「日本は初めて？」

「初めてない」

「じゃあ、前に来たことあるわけだね」

外人は返事をせずに霧雨にぬれた窓外を哀しそうに眺
めていた。ぬれたガソリン・スタンドに車が二台とまっ
ている。ソニーの大きな広告が向こう側に見える。彼が
昔、この国に来た時にくらべて、何と風景は変わってし
まったことだろう。あの時の日本と来たら、ほとんど何
もなかったのだ。

客が返事をしないので運転手はサービスのつもりか、
ラジオのボタンを押した。

「この雨は今夜まで続く見込みでしょう。天気予報を終わります。続いて株式市況をお知らせします」

そう……ロバートが最初に来た時の日本はいたるところにまだ焼け跡や戦災地が残っていた。こんなタクシーもほとんどなかった。日本人たちは痩せて顔色が悪いのに、それでも蟻のように働いていた。

「お客さん。町田のどこに行けばいいの」

横浜街道が近くなると、雨のせいか車がいたるところで混んでいた。

「はい」

「町田って広いからね。どこに行けばいいの」

「たんぼ……」

「たんぼ？ そんなところがあるのかね。いや、行けば、誰かにたずねて見るけれどさ」

信号が赤からまた青に変わり、列をつくった車は道の泥をはねあげながらまた走りだした。

車のワイパーがかすれた音をたてて動いている。

運転手はハンドルを握りながら、バックミラーに映っている外人が、食い入るような眼で窓の外を見つめているのをチラッと眺めた。

（変な外人だな。東京や横浜に行かず、町田みたいな田舎町に行く。一体、何の用で日本に来たのだろう）

あまり良いとは言えぬその服装から、今日までたびた

び乗せたアメリカの観光客やバイヤーとは思えなかった。観光客ならばチップをはずんでくれるのだが、この客からそれを当てにすることは無理だろう。

横浜街道が二四六号線におつかつて、そこから町田市に入る。市といってもそのあたりはまだ桑島が拡がっていて、隣にガソリン・スタンドを作った農家の葦屋根と柿の木が雨にぬれていた。

「ここから町田だけだなあ。町田のどこなんですか」

運転手はもう一度、外人に行き先をたずねた。

「外人さん。町田のどこ」

「たんぼ」

「たんぼ？ たんぼというのは田のたんぼかねえ」

ふりかえって当惑したような表情をしているロバートを見ると

「外人さん。その方向は知っているの。困ったなあ。仕方ねえや。ちょっと待って下さい」

車をガソリン・スタンドに入れて、近寄って来た青年に

「ちがうんだ。たんぼという場所が町田にあるかねえ。この外人さんが行きたいって言うんだ」

「たんぼ」

「そう」

青年は窓からロバートのほうをちらっと見ると、

「あることはあるけど……ガラのあまり良くないところだぜ」

「へえ。どんな場所だね」

青年はニヤッと笑って

「なに連れ込み宿や飲み屋が並んでいる場所だけど……俺たち、あまり行かねえな」

「とにかく、方向、教えてくれ」

運転手は青年から方角をきいて再び車をスタートさせた。

町田の街に入ると、雨のせいかな人の少ない商店街はむかしの街道を思わせるように狭かった。電信柱にストリップの広告が少し破れてはりつけてあった。

その商店街を横に突き抜けて、小田急の踏切を渡ると、運転手は

「お客さん。ここでしょ」

ロバートは扉を少しあけて、あたりを見回して言った。

「ここでない」

「たんぼだろ。なら、ここなんですよ」

「ここでない」

「困ったな。あんた、一度来たことあるの。すっかり変わったんじゃないのかね」

ロバートは車からおりて、しばらくの間、棒のように直立して、周りを調べていた。それから彼は線路の横を

流れている小川に眼をやった。

「おう」

突然、その口から呻くような声が洩れた。

「ここ、たんぼ」

「そうでしょう。間違いない筈だよ。料金もらえますか」

雨は小降りになっていたが、まだ霧のようにロバートの顔や洋服をぬらした。

泥水をはねあげて車が消えたあと、この外人は古靴をもって、水溜りのあちこちにできた道を歩きだした。

バラックのような飲み屋が五、六軒並んでいる。連れ込み宿の看板がみえる。その上の空は鉛色で切れ目が無い。見捨てられた映画のセット街のようにわびしく、哀しい風景だった。

まだ客が来るには時刻が早いのか――

バラックのようなその五、六軒の飲み屋は閑散としていた。顔色がひどく悪いのに、病人のように眼のふちにアイシャドーを塗った女の子がその店の前にたって、ぼんやりと雨のあがりかけた空を見上げていた。

ロバートがその前を通りかかると

「へい」

とその女の子は猫のような表情をつくって声をかけた。